

被爆70年の聞き取り

「“ノーモア・ヒバクシャ”を実現するために」

広島・長崎の被爆から間もなく70年を迎えようとしています。

この長い間、被爆者のみなさんは体と心に深い傷を負い、その不安と苦しみの「生」を生きながらも、原爆は人間に何をなし続けるのかを身をもって告発してきました。核戦争の地獄の体験と、被爆者として生きねばならなかった「生」を通じた命の叫びは、国内外の人びとに原爆被害の実相を知らせ、“核兵器は人間と共存できない”、“ふたたび被爆者をつくるな”の世論を広げてきました。

しかし、核兵器廃絶を実現するためには、“ノーモア・ヒバクシャ”の志を被爆者とともに担う人びとの輪をさらに大きくしなければなりません。

このとりくみは、被爆者とその思いを受け継ごうとする人たちが語り合う場を数多くつくり、被爆者一人ひとりの声を「聞き取り」の形で集約し、次の世代や世界に継承しようとするものです。その声は2015年のNPT(核兵器不拡散条約)再検討会議に届けるなど、さまざまなステージにおいて活用し、核兵器廃絶への国際世論を高めることにも反映させたいと思います。

〈原爆地獄〉から70年を生きぬいてきたあなたの思いのたけをぜひ聞かせてください。

2013.6 日本原水爆被害者団体協議会

ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会

■ 基本事項 (太線の枠内にご記入ください)

記入年月日	2013年 10月 27日	整理No.	—
ふりがな 氏名	児玉 三智子	性別	1. 男 <input checked="" type="radio"/> 2. 女
生年月日	明・大・ <input checked="" type="radio"/> 昭 13年 月 日 (被爆時年齢 7歳)		
現住所	〒		
被爆地	<input checked="" type="radio"/> 1. 広島 2. 長崎 [町名 古田町高須 距離 3.5 km]		
手帳区分	<input checked="" type="radio"/> 1. 直爆 2. 入市 3. 救護 4. 胎内 5. 健康診断受診者証 [一種・二種] 6. 被爆者の子・孫 7. その他		
氏名の公表の可否	<input checked="" type="radio"/> 1. 可 2. 不可		

1. 「あの日」やその直後のことで、今でも忘れられないこと、心残りなことはどんなことですか？
とくに忘れられない光景や、それを見て感じたことを具体的にお聞かせください。

原爆投下の日の直前まで、本川国民学校に通学していた。生まれた年(1938年)に国家総動員法が交付され、建物疎開(強制立退き)により、爆心地から約3.5kmの高須に転居し、学校も転校して通っていた。原爆投下時は、木造建ての小学校の1階にある教室にいた。授業が始まる前に、校庭に遊びにいこうかなと思っていたその時、ものすごい光が襲ってきた。あっという間の出来事だった。天井の梁が落ちてきて、爆風で窓ガラスが吹き飛び、鋭利な破片が飛び散った。とっさに机の下に頭を隠したが、破片は自分にも沢山刺さった。意識を失い、教室にいた友達の「痛い、痛い、助けて」という声で気が付いた。友達は梁の下敷きになっていたが、自分の力で友達を助けることはできなかった。保健室に向かい、竹のピンセットで、刺さった破片をとってもらった。包帯もないのでカーテンで先生に何とか止血してもらった。

父は当時、被爆地より約2km地点にいた。兵隊として中国に行ったが、病人だったので、日本に帰されていた。原爆は、地上580から600mで炸裂し、街中が瞬く間に火の海となった。熱線によって目の前の黒い服を着ていた人が発火し、みるみるうちに火だるまになった。見上げると電線には、人がぶら下がっていた。ただ事ではないと感じた父は、児玉さんを迎えに来てくれた。

自宅へ向かう道中の光景は、68年経つ今でも目に焼きついている。とても辛くて、忘れたいが、忘れることができない。目玉が飛び出している人、腕の皮膚がただれてびら一っとなっている人、真っ黒に焦げている人、内臓が飛び出している人などを目にした。その時、倒れていた同じくらいの年の女の子と目が合った。その子は声を出すことが出来ないが、目で「助けて」と訴えてきた。その子を助けることが出来ず、1杯の水さえ与えることが出来なかったことは、今でも後悔している。そして今でもその子の助けを求める目が鮮明に思い出されてしまう。

しばらくしたら“黒い雨”が降ってきた。ベタッと肌につく放射能を多量に含んだ雨である。

爆心地から500mで被爆した親戚のお姉ちゃんは、背中からお尻に掛けて焼けただけ、足の裏から甲まで杭が貫通した状態で、児玉さんの家まで助けを求めに来た。大好きだったお姉ちゃんのはずなのに全く識別できなかった。熱湯で煮沸した手拭いで体液を拭き、傷口にわいた蛆虫をとってやった。必死に看病したが、数日後、お姉ちゃんは、児玉さんの腕の中で亡くなった。14歳でした。

大きな傷を負わずに済んだが下痢をしていた親戚の当時10歳のお兄ちゃんも、家に助けを求め、やってきていた。しかし、8月の終わり頃いきなり耳や鼻から血を流し、口からは血の塊を吐いて亡くなった。放射能の影響であった。

2. 被爆してから今日までの人生で、とくにあなたの心に残っていることはどんなことですか？その中で被爆したためにつらかったことがあれば、お聞かせください。

- ・被爆者ということで、就職活動の際にも差別を受けた。
- ・結婚しようとした際、相手方の親戚の伯父さん(本家)に「あなたに問題があるわけではないが、被爆者の血を家系に入れることは出来ない」と言われ結婚できなかった。

- ・当時被爆者の4人に1人は、自殺を考えたといわれている。父も自殺を考えたが、自分の子どもたちの寝顔を見ると出来なかった。
- ・娘(次女)は、2010年に癌を発症した。娘に「なんで私が癌なの!」と言われ、ものすごく辛い思いをした。娘は、2011年に他界した。

5. いま、被爆者として、アメリカ政府や日本政府にこれだけは訴えたいこと、求めたいと思うことはどんなことですか？

日本政府に対して

- ・日本政府は、戦後、原爆の被害を隠蔽していた。再び被爆者をつくらないための活動をしてきた最中の、2011年東日本大震災が起きた。そして、政府はまた、福島原発での正確な被害を国民に伝えなかった。結局当時と全く政府の体質は変わっていない。

6. いま、被爆者として訴えたいこと、世界と次世代の人々にこれだけは伝えておきたいことをお聞かせください。

- ・被爆者は高齢化していて、歴史の事実、真実を出来るだけ若い人に伝えたい。
若い人がどのように世界を切り開いていくかは、若い人の考え方、行動にかかっている。
- ・この問題は、昔話ではなく、核兵器が存在している限り、今もなお続いている問題。苦しんでいる被爆者はまだ大勢いる。そして、未来を担う次の世代にも起こりうることである。だから、「ふたたび被爆者を作ってはならない」と被爆体験を語っている。

* 被爆の実相を伝え残すため、あらためて詳しくお話をうかがうことはできますか？ 可 否

[聞き取りをおこなった方の記入欄]

聞き取り日	2013年10月19日	聞き取り場所	主婦会館プラザエフ 5階
聞き手	Y.A 他5人（うち被爆者2人）	連絡先	

聞き取りの感想、受け継ぎ手として世界と次世代の人々に伝えたいことをお書きください。

今まで資料として被爆体験に触れたことはありましたが、このように直接お話を伺うのは初めてでした。身振り手振りを交えたり、声の表情であったり、時々言葉を詰まらせながらのお話は生々しく重みが全く違いました。

なぜ被爆体験を語るのか、「昔の話ではなく今もなお続いている問題であり、未来にかかわってくることだから私は被爆体験を話している」という話が大変印象的でした。これからの未来を担っていく自分たち若い世代がもっと真剣に考えていかななくてはならないと強く思いました。

(他の方からの感想：感想文からの引用)

- ・児玉さんの話、まとめて聞いたのは初めてだった。すさまじい体験を落ち着いた語りで話してくださったのでインパクトが強かった。
- ・今まで資料として被爆体験に触れたことはありましたが、このように直接お話を伺うのは初めてでした。身振り手振りを交えたり、声の表情であったり、時々言葉を詰まらせながらのお話は生々しく重みが全く違いました。
- ・児玉様のお話が自分の体験（2歳なので記憶がない）と重なり実体験のように感じました。
- ・改めて生々しい体験を感じる事の出来る時間でした。“戦争”を遠い昔のこととしないためにはどうすればいいのか、生活もスタイルも全く違う現在の生活しか知らない者にどう伝えるのか、もっともっと自分自身、考えていかなければならないことを痛感しました。
- ・児玉さんのお話を伺って68年前の8月6日8時15分から始まった人類の悲劇が、自分の心の中にありありと、その瞬間の温度やにおい、人々の苦しむ声や、それを感じてわきあがる感情とともに経験することができたように思いました。それは戦争を語るどの著作にも数段まして自分の胸に迫って来るものがあり、切実な恐怖を伴って人類の愚かしさと、そして現実に起こってしまった原子爆弾のすさまじい被害を「体験な知」として知ることができたように思います。

(記入者名 Y.A)

<返送先> 〒102-0085 東京都千代田区六番町 15 プラザエフ 6F

ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会 電話/FAX03-5216-7757